

インターネット使用が青少年に及ぼす悪影響に
関する実証調査（中間報告）

2013年1月28日

安心ネットづくり促進協議会

調査研究委員会 調査検証作業部会

1. ご挨拶

安心ネットづくり促進協議会の発足当初から、調査企画委員会（現在の調査研究委員会）の下に調査検証作業部会が設置され、インターネット使用が青少年に及ぼす悪影響の問題について実証研究事業を行うことが、この作業部会のミッションの一つとされました。

従来、インターネット使用の悪影響が心配されてきましたが、この因果関係の真偽や、対策の効果に関する実証研究は手薄い状況でした。そこで、それに関する研究を行って、インターネットの悪影響問題の議論に資する知見を得ようということになり、調査検証作業部会がこの事業を担当することとなりました。

中立性を担保するため、実証研究そのものの遂行は、安心ネットづくり促進協議会外部の研究者に委託し、調査検証作業部会は、この事業の全体的な企画や、研究進捗の確認などを行ってきました。

しばしばインターネットの悪影響が懸念されながらも、実証研究が乏しかった、(1) いじめ・暴力、(2) 性意識・行動、(3) 自殺、(4) 依存の4つの問題について扱うこととし、4班の研究者グループにそれぞれに関する研究実施を委託しました。

研究者グループは、2009年度から3年間の予定で研究を開始しました。今回の報告書は、2010年度までの研究成果を公開するためのものです。

それぞれの班から提出された報告書とともに、それらに基づいて研究結果をまとめた文章（次ページ）を掲載しています。

こうした研究の積み重ねが、インターネット問題に対する解決を適切なものにしていくために必要であると信じております。今回の成果から、何かしらお汲みとりいただけたところがあれば幸いに存じます。

末筆ながら、本事業の遂行にあたり、研究者グループや調査検証作業部会の皆様方を始め、ご支援、ご協力をいただいていた多くの皆様方に厚くお礼申し上げます。

調査検証作業部会 主査 坂元章

【坂元主査のプロフィール】

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授。博士（社会学）。文部科学省「青少年を取り巻く有害環境対策に関する調査研究協力者会議」協力者、文部科学省中央教育審議会生涯学習分科会「家庭・地域の教育力の向上に関する特別委員会」専門委員などを務めた。

2. 研究結果の概要

本事業では、4班の研究者グループが、(1)いじめ・暴力、(2)性意識・行動、(3)自殺、(4)依存の問題についてそれぞれ研究を行ったが、ここでは、それらのグループから提出された報告書に基づいて、得られた研究結果をまとめた。

なお、4つの班とも、同一の対象者について複数回の調査を行うパネル調査研究を主要な方法としている。本事業では、インターネットの悪影響の真偽を捉えようとしており、そうした因果関係を推定するためには、パネル調査研究を行うことが適当とされる。

「いじめ・暴力」班は、インターネットをよく使っていることが、実際にネットいじめなどインターネットを使った攻撃行動を引き起こす強い影響要因となるのか、また、そうしたネット攻撃を受けた被害者が精神的健康にどのような影響を受けるかなどを検討しようとした。

そのため、彼らは、同一の小学生、中学生、高校生に対して、学校を通じて3回の質問紙調査を行った（第1回：2009年12月～2010年1月、第2回：2010年6月～2010年7月、第3回：2010年12月～2011年1月）。3回とも回答した小学生は1523名、中学生は3557名、高校生は1979名であった（ただし、これらの対象者は2つに分けられ、一部の質問項目が異なっていた）。

得られたデータを分析した結果、(1)仲間に対して攻撃した加害経験（過去1カ月）は、インターネットを使わない場合（28.5～31.2%）よりも、インターネットを使った場合（1.2～3.6%）のほうが、はるかに少ないことが示された。しかしながら、(2)インターネットを使った攻撃行動の加害者になるよりも、被害者になったと感じている場合（3.4～9.0%）のほうが多く、同時に、(3)ネット攻撃の被害を受けると、学校適応感が低下したり、抑うつが高まるなど、精神的健康が悪化する結果を示唆する結果が得られており、ネット攻撃の生起頻度が仮に少ないとしてもその問題は無視できないと考えられる。

また、(4)インターネット使用がネット攻撃を増幅する影響については、影響が検出される場合が限られており、インターネット使用そのものの影響力が強いとは言えず、ネット攻撃に対して影響する要因が、他にもあると見られる。例えば、(5)高いICTスキルがネット攻撃を増幅する一方、高い情報モラルがネット攻撃を抑制する傾向が検出された。それゆえ、ネット攻撃を抑制するうえでは、インターネット使用そのものを制限することの他、情報モラル教育が成果を挙げること効果を持ちうると思われる。ただし、ICTスキルや情報モラルの影響が検出される場合も限られており、さらにネット攻撃に影響する要因を特定し、対策に生かしていくことが望まれる。

「性意識・行動」班は、インターネット使用が高校生の性意識や性行動にどのような影響を与えるかなどを検討しようとした。

そのため、彼らは、同一の高校生に対して、学校を通じて3回の質問紙調査を行った

(第1回：2009年12月、第2回：2010年6月～2010年7月、第3回：2010年12月～2011年1月)。3回とも回答した高校生は734名(男子282名、女子452名)であった。

得られたデータを分析した結果、(1)インターネットをよく使う高校生のほうが、そうでない高校生に比べて、同年代のセックス経験を高く見積もるようになること、(2)とくに女子においては、デート、ペッティング、コンドームなしのセックス経験が増えることなどが示され、インターネット使用が性行動の活発化をもたらしていることが示唆された。しかしながら、(3)インターネット使用が性意識・行動に与える影響よりも、友人・先輩との性的情報交換が与える影響のほうがずっと大きいことも示され、インターネット使用の影響力は、それがあっても、そればかりに注目すべきものとは言えない。なお、(4)インターネット使用の影響は、パソコンよりも、携帯電話における使用において、よく見られた。

また、(5)正しい科学的性知識を与えるだけでは、インターネット使用の影響を低減せず、性教育やメディアリテラシー教育によって、性行動に関する適切な価値判断力や、性情報に対する批判的思考力を養うべきことが示唆されるとともに、(6)インターネットの影響に対してフィルタリングが効果を持つ場合が多いことなども示された。

「自殺」班は、自殺関連サイトの使用が自殺念慮や精神的健康に悪影響を及ぼすかについて検討しようとした。

そのため、同一の20～40代のインターネット使用者に対して、2回にわたるウェブ調査を行った(第1回：2011年1月、第2回：2011年3月)。対象者は、4103名の自殺関連サイト使用者と、4000名の自殺関連サイト非使用者であった。

データを分析した結果、(1)20代の対象者では、「他者に自殺したい気持ちを打ち明ける」「そうした行動に対してリプライをもらう」など、インターネットにおける双方向使用をよく行う対象者のほうが、そうでない対象者に比べて、自殺念慮を低下させる傾向が見られた。一方、(2)30～40代では、インターネット使用者は、非使用者に比べ、自殺念慮を低下させたり、精神的健康を向上させたりせず、むしろそれらを悪化させる傾向があり、とくにサイト閲覧などの一方向的使用によってそれが見られた。このように、インターネット使用の影響は世代によって大きく異なっていた。

また、(3)いずれの世代でも、自殺念慮や、精神的健康の問題があると、インターネットの一方向的使用が増加する傾向があった。20代については、自殺念慮が高まった使用者に対して、一方向ではなく、双方向使用に誘導することが、自殺予防の手段になるかもしれない。さらに、(4)自殺関連サイト使用者は、非使用者に比べ、精神的健康が不良であり、また、自殺リスクも低くないと見られることから、こうした使用者を専門的援助者につないでいく必要性も指摘された。

「依存」班は、インターネットの長時間使用が、インターネットを使用していないことに耐えられないという依存状態をもたらすか、また、依存状態にあることが、実際に

生活時間や精神的健康に影響しているかなどを検討しようとした。

そのため、2つのパネル調査などを行った。パネル調査の1つは、東京都の中学生840名を対象として、学校を介して2回の質問紙調査を行うものであった（第1回：2010年9～11月、第2回：20112～3月）。もう一つは、1163名のオンラインゲーム・サイトの利用者に対する、2回にわたるウェブ調査であった（1回目：2010年9月、2回目：2011年6月）。

データ分析の結果、(1)長時間使用によって依存状態が強まる傾向は、中学生調査のパソコン使用や、オンラインゲーム利用者調査で検出された。とくに、中学生のパソコン使用については、それが依存状態をもたらすとともに、依存状態がさらにパソコン使用を伸ばすという相乗的影響の傾向が見られており、これは、中学生のパソコン使用の依存性が低くないことを示唆する結果と言える。また、(2)中学生のパソコン使用においては、SNS、掲示板、ツイッターを使用する場合の影響がより強いと見られる。ただし、(3)中学生の携帯電話使用については、長時間使用の影響は検出されず、携帯電話を長く使っているからと言って、それから抜け出せなくなるという一般的傾向があるとは言えない。

また、(4)中学生やオンラインゲーム使用者が依存状態にあることによって、生活時間や精神的健康の問題が生じうることを示す結果がしばしば得られており、依存を防止する取り組みの必要性が指摘された。さらに、(5)インターネットの長時間使用ばかりでなく、元来の人間関係や精神的健康の悪さも、依存状態を引き起こす要因でありうることも示され、依存の防止のためには、インターネット使用の制限ばかりでなく、人間関係や精神的健康を向上させる取り組みも重要と考えられることが指摘された。

以上のように、4つの班の研究によって、さまざまな結果が得られたが、3つの注意事項がある。

第1に、本報告では、SMSのように厳密にはインターネットとは言えないものについても、しばしばインターネットに含めて分析されている。

第2に、本事業の調査は、2009～2010年度に行われており、インターネットをめぐる状況について現在とやや異なる面がある。例えば、現在、スマートフォンの普及が進んでいるが、今回の調査ではそのデータは少ないと考えられる。

第3に、本事業で得られた結果と示唆は、これまで研究が乏しかった問題に関する実証的な知見であり、一つの資料として貴重と考えられるが、一方で絶対的でもないことに留意する必要がある。今後の研究によって、本研究の知見が検討され、その頑健性や一般性などが確認されていくことが望まれる。